経済統計学会第59回全国研究大会
企画セッション「日本の統計史を考える－
わが国統計の揺籃期」

2015/09/12
(於　北海学園大学)

柳澤保恵と柳澤統計研究所の活動について

総務省統計研修所
小林良行

総務省統計研修所
Statistical Research
and Training Institute,
Ministry of Internal Affairs and Communications

目次

- はじめに

1. 柳澤保恵と統計学との関係
2. 柳澤統計研究所の活動

- 今後の方向

はじめに

- 杉亨二は、国の統計事業を行うには統計学の学理と統計調査の実務に関する知識を身につけた専門職員の育成が必要であることを強く認識しており、明治15(1882)年に官立の統計教授所設立の上申をしたものの実現しなかった。
- その後、大正8(1919)年に内閣統計局で内閣統計講習会が始まるものの、政府内に一つの組織として「統計職員養成所」が設置されたのはようやく大正10(1921)年になってからであった。

- この間約40年、国及び地方の職員に対する統計教育は、杉らによる共立統計学校、統計学社と東京統計協会による統計講習会、地方の統計協会による地方統計講習会など、主に民間団体によるものが中心であったと言えよう。
- 柳澤保恵（やすとし）伯爵は、学習院大学在学中及び欧州留学中に統計学を学び、明治・大正・昭和初期を通じて統計思想の普及、統計職員の啓発などの活動を行っており、大正2(1913)年7月1日に柳澤統計研究所を設立している。
- 柳澤保恵と柳澤統計研究所の活動について、当該研究所発行の定期刊行物等からわかったことを報告する。

★柳澤統計研究所の定期刊行物

　定期刊行物(実際の刊行周期は必ずしも一定でない時期がある)として下記の2誌がある。

(1)統計書解題、調査および研究(国際統計協会会議の報告特集もあり)、論説、寄贈図書目録、翻訳などを収録している『季報等』(下記のように書名は変遷しているが、ここでは一番長い期間用いられた書名で総称することにする)

①『統計書解題月報』(第1号～6号),大正14(1925)年2月～大正14(1925)年7月

②『柳澤統計研究所月報』(第7号～17号),大正14(1925)年8月～大正15(1926)年6月

③『柳澤統計研究所季報』(第18号～41号),大正15(1926)年9月～昭和12(1937)年12月

④『柳澤統計研究所所報』(第42号～52号),昭和13(1938)年12月～昭和18(1943)年12月

(2)研究所の年間事業活動記録、予算および決算報告、人事などを収録している『報告』。毎年文部大臣に提出。

①『柳澤統計研究所報告』(第13回～22回は前記刊行物に統合),大正4(1915)年～昭和12 (1937)年

※ 『柳澤統計研究所季報』(第41号)に掲載された第21及び22回報告が最後となっている。

1.　柳澤保恵と統計学との関係

1.1 生涯

- 明治3(1871)年に旧越後黒川藩の藩主柳澤光昭の次男として誕生。名は光敏(みつとし)。
- 明治19(1886)年に旧大和郡山藩の藩主柳澤保申（やすのぶ）の養子となり、明治21(1888)年に名を保恵に改名、明治26(1893)年養父の死去により家督を相続。

※養母明子は左大臣一条忠香(ただか)の長女。明治天皇皇后(昭憲皇太后)の姉。

- 明治37(1904)年には初めて貴族院議員。
- 没年は昭和11(1936)年。墓所は歴代の大和郡山藩主と同じ東京都新宿区河田町二丁目の月桂寺にある。

1.2 統計学との出会い

- 明治24(1891)年に学習院大学科に入学し呉文聡(くれあやとし)に統計学を学ぶ。
- 明治27(1894)年学習院を卒業後、同年10月に欧州（ドイツ、オーストリア、ベルギー）に留学。欧州留学中は、社会学、国家学、仏語を学び、統計学は明治30(1897)年～31(1898)年の1年間、ウィーン大学でステルネッグ名誉教授に師事。

※「恩師カール　テオドア　フォン　イナマ　ステルネッグ先生」『季報等』第40号に留学当時の欧州各地の大学での統計学教育の概況、ステルネッグの生立ち・業績に関する明治42年春執筆の稿が収録されている。

- 明治33(1900)年9月に帰朝後は早稲田大学で統計学講師を務めている。
  - ・講義録として『柳澤保恵講述　統計学(統計事業史の部)』1901,早稲田大学出版部
  - ・研究所から三回忌法要記念(1938)として『柳澤保恵講述　統計学(統計事業史之部)』を再版。

1.3 統計事業とのかかわり

- 東京市統計顧問、神戸市市勢調査顧問、国勢調査準備委員会委員、内閣統計局顧問、臨時国勢調査局参与、国勢院参与、中央統計委員会委員、人口問題研究会会長、統計学社社長などを務めている。

※留学中に統計局事務嘱託の発令があるが実務に携わったとは思えない。

※第1回国勢調査では統計調査員として実査に従事。

※第一生命初代取締役(後に社長・顧問)、有楽座(高等演芸場)会長・相談役、東洋缶詰監査役など実業界でも活躍。この他、東京市会議員。

- 統計局との最初のかかわりは、高野岩三郎とともに大正5(1916)年10月9日に就任した内閣統計局顧問の官職。同職には大正8(1919)年10月28日まで在職。

※内閣統計局顧問は花房直三郎局長の退官に伴い大正5(1916)年4月10日に新設されたもの

- 国勢調査以外の統計調査では

「人口動態調査、労働統計実地調査、家計調査、失業統計調査、国富及び国民所得調査等各種の重要統計調査の計画準備に参画」している。

※「伯爵柳澤保恵正伝」

- 独自に実施した調査として、小票方式の郵送調査による華族動態調査、華族静態調査がある、

1.4 国際統計協会との関係

- 国際統計協会正会員の資格を有し、第7回国際統計協会会議(明治32(1899)年)から第21回国際統計協会大会(昭和8(1933)年までの間に日本代表委員として計11回(第7,10～13,15～19,21回大会)派遣されている。この間の保恵以外の派遣代表委員として、内閣統計局長花房直三郎が2回、同阿部壽準が1回、同長谷川赳夫が2回(うち1回は保恵と同じく第19回東京大会)派遣されている。

- 東京で開催された第19回国際統計協会大会の準備委員会会長を務めた。欧米以外の国での開催は初めて。
- 国際統計協会の会議では日本の統計事情などについて東京大会を除き毎回論文を提出している。
- 国際統計協会会議以外にも万国衛生及び民勢会議、第1回国際労働統計会議への出席、欧米都市における統計に関する事項調査(東京市からの嘱託)、国際人口問題研究会議の国際評議員として論文提出などの活動を行っている。

1.5 国勢調査との関係

- 保恵は、国際統計協会大会以外にも政府委員として国際労働統計家会議に出席するなど、各国の統計事情を知る機会も多かったことから、諸外国に比べて国内における統計に関する認識の低さを痛感していた。特に国勢調査についてはその必要性を早くから認識しており、帝国議会貴族院では第一回国勢調査の実現に向けて強く働きかけを行っている。また、第一回国勢調査の実施の折には、保恵自身が各地を訪問して宣伝講演会(*)を行っている(このとき統計学社社長。副社長は横山雅男)。

※「国勢調査と帝国議会」『季報等』第40号

＊18県77市町村で延べ95回の講演、約4万1千人が聴講。保恵は10県訪問。

総務省統計研修所
Statistical Research
and Training Institute,
Ministry of Internal Affairs and Communications

2.　柳澤統計研究所の活動

2.1 設立と所在地、終焉

- 設立は大正2(1913)年7月1日。設立当初は東京府豊多摩郡大久保町字百人町336番地第1号館(柳澤家所有の家屋)に置かれていたが、東京市芝区田町8丁目1番地第１号館(柳澤邸内)が新築完成したことから大正4(1915)年4月10日～15日にかけ移転。
- 大正10(1921)年3月19日付で財団法人となる。
- 太平洋戦争末期に強制(建物)疎開の対象地となった。
- 柳澤統計研究所の名前は、昭和27(1952)年の日本学術会議への内閣総理大臣の諮問「民間学術研究機関の認定について」の中に見られることから、少なくともその時点までは存続していた可能性がある。

- 保恵が昭和11(1936)年に没し、代表者が柳澤保承(やすつぐ)となる(保承は保申の長男、保恵の養子)。
- 保承が研究所の総裁となると『柳澤統計研究季報』は『柳澤統計研究所報』と改題され、年2回の発行となった。保恵が自身の講演録などを積極的に掲載するようにしていたのに対し、保承は巻頭言をたまに書く程度で、論説に柳澤保篤(保申の三男)が数回寄稿しているものの精彩を欠く感が否めない。
- 『柳澤統計研究所報』の最後の号(第52号)は昭和18(1943)年12月号である。保承の没年は昭和35(1960)年なので、戦中・戦後の柳澤統計研究所の活動については不明な点がある。

2.2 設立の目的、事業分野など

『柳澤統計研究所第一回報告』に設立目的、事業分野などが示されている。

- 「主として人口及び社会統計に関する研究及び其調査に従事し公的統計機関の補助たる任務の遂行を期す」
- 研究所の経営は、保恵本人の「独力経営に成る」
- 研究室、読書室、文庫を設け、読書室は「中学校卒業若しくは之と同等以上の学力ありと認むるもの」に開放
- 関係者の研究・調査した事項の随時刊行
- 定期若しくは臨時に統計講習会又は統計講話会の開催
- 希望者に対し対価を得て「統計表様式及び材料募集の立案若しくは統計表の調製に応じ又は統計材料を供給」

- 研究所の組織(多少の変遷がある)

総裁(柳澤保恵、のち保承)

研究部	印刷部	庶務部
委員(若干名)	主任(委員を充てる)	主任(委員を充てる)
書記(若干名)	書記(若干名)	書記(若干名)

所掌

研究部	人口及び社会統計に関する研究及び調査
印刷部	主として研究部における研究及び調査事項の印刷及びその他の印刷
庶務部	研究所全般にわたる庶務及び文庫に関する事務

総務省統計研修所
Statistical Research
and Training Institute,
Ministry of Internal Affairs and Communications

2.3 設立後の主な活動

- 保恵を研究所総裁とし、元東京市技師の坂本敦を主席委員、元東京市統計係長心得の飯田茂作を兼務委員として下記の事業に着手。

① 東京市市勢調査(明治41(1908)年) の調査小票を借受け、東京市で作成放棄した職業名索引の編纂

② 神戸市市勢調査の調査小票を借受け、すでに製表されたものの外にさらに有益と認められる数表を作成

③ 統計局より奈良県、山梨県、青森県、鳥取県、和歌山県、佐賀県の人口動態統計小票を借受け独自集計

★上記の活動は現行の統計法で創設された調査票情報の二次的利用のプロトタイプと位置づけられよう。

- 華族動態調査、華族静態調査の実施、製表
- 電話網に関する統計的調査の実施、製表
- 国際貸借統計に関する研究
- 内閣統計講習会や地方統計講習会での講演(保恵及び坂本が中心)
- 研究所における月次講演会(大正14年より)
- 海外統計界の近況の紹介、外国統計学者等の論文和訳
- 統計局や地方で開催される統計展覧会に所蔵図書や資料を貸し出し出品
- 統計局、農林省、商工省などで地方統計主任官の会議がある際に晩餐会を催し招待
- 大和郡山在住の者に奨学金の貸与

(参考)郡役所全廃と電話網

- 本春の貴族院に於ける郡役所廃止の理由として若槻首相は、交通の発達、経費の節減、事務の簡捷を挙げられたるが柳澤総裁は上院議員として其所属研究會に於て特に交通の発達に關し統計上より徹底的の調査報告をなし、其結論に於て交通の発達の不十分なる事實を指摘し、交通不便の土地に道府縣支廳又は出張所を新設せざる限り原案反対の意見を開陳せられたるが、上院に於ては豫算案審議に際し右の趣旨を含める希望決議を通過せり。
- 右交通調査に關し柳澤総裁は、陸路網、鐵道綱、水路網、車路網、電信電話網等細密に調査せられたるが殊に電話網に關しては最も必要なる論拠として研究せられ数十ページに亘れる報告書を完成せり右は交通統計研究上必要なる材料なるを以て其調査の結果は追て本月報に掲載する事あるべし。

※『柳澤統計研究所月報』第16号(大正15年5月) p.7

(参考)統計協會の設立

- 奈良縣添上郡では、郡役所廃止の結果、統計事務に多大の影響を來すべきを慮り、本年七月を以て添上郡統計協曾を設立し、同郡辰市村田中長市郎氏を推して會長となし、郡内統計事務の統一改善を図ることとした。

※『柳沢時計研究所季報9月号』第18号(大正15年9月)p.34

総務省統計研修所
Statistical Research
and Training Institute,
Ministry of Internal Affairs and Communications

今後の方向

今後の方向として以下のようなことを進めていく予定。

- 柳澤自身の活動及び研究所の活動について、さらに分類整理。
- 明治・大正・昭和初期(戦前期)の統計思想普及活動、統計職員養成事業を通時的に見たときの柳澤統計研究所の位置付けの整理。
- 統計講習会等で教授されていた科目とその変遷の整理。

参考文献及び資料

- 参考文献

安藤鎮正(1969),「明治・大正期の統計講習について－統計職員養成所前史資料－」『統計局彙報』第18号,151-193

川上悠介(2013),「芝玉八丁目にあった柳沢伯爵邸」『資料館だより』第72号,5,港区立港郷土資料館

故柳澤伯記念事業実行委員編(1937),「伯爵柳澤保恵正伝」,東京統計協会

三潴信邦及び森岡清美(1997),「柳澤保恵と柳澤統計研究所」『統計学』第72号,34-42

- 参考資料

柳澤統計研究所,『統計書解題月報』(第1号～6号),1925年2月～1925年7月

―,『柳澤統計研究所月報』(第7号～17号), 1925年8月～1926年6月

―,『柳澤統計研究所季報』(第18号～41号), 1926年9月～1937年12月

―,『柳澤統計研究所所報』(第42号～52号), 1938年12月～1943年12月

―,『柳澤統計研究所報告』(第13回～22回は前記刊行物に統合),1915年～1937年